

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第四十五回）

「久邇くの都みやこ」

今造つくる 久邇の都は 山川の

清みけき見れば うべ知らすらし

作者 大伴家持（巻六一〇三七）

（解説）今度造営されている久邇の都は、山や川の清らかなさを見ると、ここに都をおつくりになるのはまことにもつともなことであるに違いない。

○天平十二年（740）十月十五日に、聖武天皇が「恭仁宮に幸す」と宣言して、平城京から遷都してきたところで、「恭仁京」とは呼ばれた。当時、たびたび疫病や戦乱に見舞われ、世情不安の中、こうした事態を打開するためか、聖武天皇は、奈良の平城京を離れ、伊賀・伊勢・美濃・近江など各地を転々とした後、天平十二年（740）に現在の京都府の最南端部に位置し南は奈良県奈良

市に接した地を中心に「続日本記」には都の造営については天平十二年（七四二）十二月十五日に着手、同十五年（七四四）十二月二十六日に停止したとある。

○この歌の題詞には「久邇の京を褒めて作る歌一首」とある。

みかのほら　くに　みやこ
三香原　久邇の京は　荒れにけ

おおみやびと
り　大宮人の　移ろひぬれば

作者　田辺福麻呂歌集（巻六一―一〇六〇）

（解説）三香原の久邇の都はすっかり荒れてしまった。大宮人がつぎつぎに移って行ってしまったので。

○恭仁京は天平十六年（744）にわずか四年あまりで都は未完成のまままで廃都されてしまう。

○久邇の都は恭仁京、三香原は現在の「瓶原」を指しているといわれる。

○恭仁京の宮域は、都が移った後は山城国分寺として最利用され、現在も金堂跡（大極殿跡）と塔跡基壇が地表に

残されている。

(参考文献)・日本古典文学大系・高城修三著「神々と天皇の宮都をたどる。」4他

(写生地)「恭仁小学校」裏手にある広場に建っている「恭仁京大極殿跡・山城国分寺址」の碑と新京が置かれたときの華やかさを感じさせる今盛りの桜、その後ろに瓶原(みかのほら)の地を描く。(杏花)

○交通手段・JR関西本線「加茂駅」徒歩30分・木津川市加茂町(恭仁京跡)

